

昭和二十四年六月二十五日
 昭和四十二年六月二十五日
 第三種郵便物認可
 第三行（毎月一回・十五日発行）

（通第二一七号）

慈光

第十九卷

第六号

目次

私の入信の経路……………	池山栄吉……………	(1)
愛書と求道……………	福島政雄……………	(12)
近角先生著『懺悔録』		
遇斯光録……………	花田正夫……………	(16)
ドイツに咲く念仏の花……………	山田宰……………	(22)

私の入信の経路

池山栄吉

私自身の信仰の経路はどうであるか？自分のことだから一点のすきもなく、もれなく、くわしく、明瞭的確に語れそうなものですが、実際なかなかそういくものではありません。それはそのはず、もと私達の思うことすることには私達に知られていない無数の因子が働いているからです。まして信仰などという極めて奥深い、神秘的なたましいの過程に至つては、到底自分の意識した材料だけで十分の解説の出来る筈のものではないのです。とりわけ絶対他力の信仰は、私達が信じようと思つて信ずる、言いかえれば、私達に信ずる意志の鞏固性があつて、その力で信ずるのではない。他力の方から信ぜしめられるのでありますから、どうしてもそこにXという私達にはかり知られない因子が加わります。ですからなおさらむづかしいわけでありませ

が、実際——私が現に思つているように——私の四十二の時信仰に入つたものとして、そこに至るまでの経過を観察してみますと、要するに矢張り、自己を見下げ果てたと

き、絶対に信頼した人の手引で信仰に達した。やゝ具体的に云えば、自身の罪悪深重、煩惱熾盛に驚かれて、どうすることも出来なかつた時、親鸞聖人のお言葉にしたがつて念仏が申されるようになったのであります。これからすこしそのいきさつを申上げて見ようと思ひますが、只今申しました通り、とても完全に言い表わせるものでないのですから、そのおつもりでお聞きと願ひます。

真宗の家庭

何はともあれ、私が真宗の家庭に生れたということが、すでにすでに私の意志のほからいを超越した、後年私をして名実ともに真宗信徒とならせる一大因子であつたに違ひない。こういうと真宗以外の家庭に生れた人は真宗に入り難いというようにきこえるが、それは必ずしもそうでない。真宗でいながら、名ばかりで無宗といつた方がむしろ事實に適する人が極めて多いように、本来他宗、もしくは無宗であつた人が真宗にはいつて真宗の信仰を得る人が甚だす

くなくない、却つてその方が徹底し易い可能さもある位である。が、真宗以外の人は真宗のいわれを聞く機会さえ得ずに終るのが大多数であるのに、その機会に接する可能の多いのは、真宗の家に生れた人に恵まれた強味であります

母の感化

私の父も母も代々真宗の家に生れた人でしたが、特に母には何かにつけて篤信の傾向が著しうございましたので、その影響が自然私の宗教性をすくなく刺戟したことは疑えないのであります。時々母から宗教の話をかきされたこともあり、説教の座に伴われたこともありましたが、とりわけ私を最も強く真宗にひきつけ、真宗から離れにくくしたのは、母が重病にかかつて助からないかも知れないと母自身も思い、はたの者もそう思つたとき——こういうことは一度ならずあつたのですが——当時まだ小学生だつた私に云いかけた言葉でした。

『私は今度は死ぬかも知れない、死ねばお浄土へ参らして頂く。お前も御信心をいただいて後からおいで！』そりでない親子は一世というから、この世限りでもう会うことが出来ない。だから是非信心を頂かなくてははいけない。でも、もしそういかなかつたら、いいや！私が御浄土から迎いにきてあげるから』

と、こう言つた母の言葉は私の心に沁み込んで、大きく

なつた後まで忘れることができませんでした。大分信仰の道から遠のいていゝるな、と気付くやいなや、すぐ思ひ出すこの言葉にひかされて、立ちもどらずにはいられませんでした。

真宗眞負

こうしたことが因となつたのでしよう。長じて高等の教育をうけつた頃、積極的に信仰そのものは与えられていませんでしたが、真宗に対する眞負の念はなかなかかんなものでした。私の若かつたころは、ただ宗教に無關心なばかりでなく、一種の反仏教的の氣風が知識階級の一部にたたよつていた時代です。ですから私の先生の中にもそうした系統の人があつて、折にふれては矢鱈に仏教をけなす話を聞かされたことがあつたのですが、それにはどうも心服できないで、内心反感を抱かされたものでしたがそれがもし友人でもあつたなら、平生内気な私も、随分口角泡を飛ばして議論し合つたこともあつたのです。が、要するに外に対して、即ち、基督教に対して仏教を、他宗に対して真宗を擁護し、より正しく言えば眞負したというに止まつて、内に——型としては心得ていたが——活きた信仰といつては、実は何も無かつたのであります。

信への憧憬

真宗眞負は、真宗の信仰こそ、あらゆる信仰という信仰

のうちで、尊さに於いて無比である、という価値判断を予想する。すでにこの判断があるからはいづまでも単に最負というだけで甘んじているはずはない。二十をすぎた頃から内省の傾向が益々深かまり、習性となるにつれて、成程真宗の教理は人生の実際にかにも適切なものたという感じがよいよやく、力強く根を張るようになりまして、いづとはなしに最負の念が一転して憧憬の情と変つていきました。ところへもつて三十前後から近角君との親交は、信仰的人格を現前せしめて、さらにこの趨勢を促進する動力を与えたのであります。

清閑に恵まれて

私が六高の教授として岡山に落着くまでには、当時私の理想とした社会事業の実現に関して、だんだん失敗の歴史があつたのですが、この経験は私に自己の真相を看取すべく、沈痛な内省の資料を供してくれました。岡山での生活は、私に取つては、東京大阪でのそれに比して、何のことはない市井を遁れて、山林に隠れたような、至つて清閑な且つ清貧なものであつただけ、それだけ多年の懸案たる信仰の憧憬を果遂すべく、静慮の機会に富んでいました。考えて見ると、この清閑と清貧ということがありがたいてす両者は私共のあれくるうこころの駒を、信仰の門戸に駈る鞭と、**相**車とであります。

拍

かしらと疑われ、のみならず時としては、持つてた筈の信仰が、また失われたと思われることさえあると、何だか心苦しくなつて、人の期待にそむかない信仰の確立に焦りました。この心苦しさと、いい気持とが一緒になつて、あつくすぐつたい感じを醸したのだと思います。

出にくい念仏

この時代に、私が一人ひそかに手古摺つた問題が二つありました。一つは念仏が出ない、と云つてもいいぐらい出にくいことでありました。これはどうも信仰の持主としてはいかにもおかしい、つじつまの合わないはなしと思わずには居られませんでした。で、つとめて称えようとしましたが、人前では——信者ばかり居るところでも——氣まりが悪くて、喉まで出かかつて来ても、そこで押えてしまふのが例でした。そうかといつて一人の時でもなかなか出ません。かまどの奥にうずくまつた小猫のように、無理に引張り出さない限り出ようとしません。余程思い切らないと、たとえば厳冬の朝、温かい寝床から起き出でて、冷水摩擦をするように、余程奮発しないと出て来ない。苦しまぎれに案じ出した一策が、日頃口癖になつていた唱歌に代えて念仏を口癖にしようと決めたことで、うっかり唱歌が口に出て、ハツと気付くや否や念仏に代える。というまことにおかしくもあり、いじらしくもある、飛んだ悲喜劇を演じ

光明の縁

私をして信仰の門戸をくぐらせずにはおかない段取りはこうして着々として進捗して来たのであります。「十方世界を照耀する無碍光遍照の明朗なるにてらされて、無明沈没の煩惑漸々にとらけて」とはこうした過程をいうのではないでしようか。しかし「涅槃の真因たる信心の根芽わずかにきざすとき」というところまでとどくには、まだ幾春秋を送らないではならなかつたのです。

聞法のうろわかりして春暮れぬ

淡柿のやがて浹抜け日和とも

旬 仏

人によると案外すらすらいれるのに——現にそうした方がここにも数名見えておいでです——しぶかきのしぶとい私が、うろわかりの煮え切らない状態から、思い切つて決定の信、横超の境へぬけるには、まだなかなかひまがかつたのであります。

くすぐつたい感じ

岡山の信仰界の人々は、はじめから私を遇するに篤信の人、決定的信仰の持主を以てしました。私の方ではこれに對して、一種くすぐつたい感じなしにはいられなかつたのです。長年信仰を求めて来たが、今ではどうやら手に入れた気がする。人もそれを認めているのだ、と思うと何だかいい気持になつたが、どうかすると我ながらこれでいいの

つつあつたのです。

仏陀の存在

今一つは信仰に随伴しておけるといふより、むしろ直接信仰そのものの有無、成否の問題で、如何にして仏陀——信仰の対象、救済の本体である仏陀の存在が信じられるかといふことであります。信仰の筋書、真宗の教理一般はもうよく呑み込んでいる、これ以上わかりようのないほどにわかつている、と思つてに拘わらず、肝腎の仏陀そのものが、或時はあること疑いなく、或時は——そう考えたくはないのだけれども——無いとしか思われなかつたのであります。

出たり引込んだり

月の世界へ旅した裁縫師が、お月さまの註文で、その上着をこしらへることになつて寸法を計つたところ、背中の方が佝僂のように丸く、腹の方が馬鹿に薄い。変な恰好だとは思つたが仕立てあげて着せて見ると案外よく似合つたところが驚いたことには、一日一日とたつにつれて、段々腹がせり出していく。仕方がないから上着の前の方をほどいて新しい布片を縫ぎ足して間に合はしていつたが、とうとうしまいに、球のようにまん丸くなつた。やれやれこれでやつと手が引けたわいと喜んだのも束の間、今度は前と反対に、背中の方がこけてきて、折角キチツと合つてた

服が、段々だぶだぶになつてくるので、また仕方がない、後の方をほどいては余計なだけ切り取り切り取りしていくうち、とうとう背中が全滅して、薄つべらの腹ばかりになつてしまつた。するとやがてお月様が寝入りこんで見えなくなつたを幸に、また同じことを繰返えされてはたまらないとコソコソ逃げて帰つたという話がありますが、仏様があるならある、無いなら無いとどつちか一方に決まれば手古摺ることもないわけですが、お月様が満ちたりかけたりするのと同様に、仏様が出たり引込んだり、明るくなつたり暗くなつたり、まるきり見えなくなつたりするのだからやりきれたものではなかつたのです。

附会方程式

たとえば信者同志が打寄つて大いに信仰を談じたとする。こうした場合には大抵大慈悲の仏陀を争うべからざる予想とする。この予想がある限り、そしてここから出発して人生の諸相を観察する限り、どう話が向くにしても、とどのつまりは一種の有り難き、喜ばしきを感じしめずにはない。その感じは信仰の結果、否、信仰そのものの発露だと思つと、自分が現に信仰に生きつつあることが疑えない。その時には嬉しくもあり満足でもあるが、さて一人になつて、不図、とはいうものの一体大慈悲を以つて我等に臨む仏陀とは、何処にどう認められるのかと自問すると——た

るばかりである。それは私自身を支配する因果の法則の外に、私に加担する或者を想定することである。即ちこの場合少くとも十以上の力を私に添えるXの存在を推断する外はない。仮に私に十の価値があるとすると、十一の力を添えるXがなくてはならないのである。そもそもこのXとは何であろうか？これこそ実に仏でなくて何であろうか！——こう私は考えたのでした。

見えない星

前世紀の中頃、ケーニヒスベルヒ大学のベツサー教授はシリウス、プロシオン兩星の運行は、一つ宛の見えない星を仮定しないでは数値の正確を期することが出来ない所以を発表して、当時の学界を驚かした。

シリウス、それはあらゆる恒星の中で、最大の光度を有する大犬座の首星である。それと天の川を距てて相對する小犬座の首星がプロシオンで、兩星とも、その陸離たる光彩によつて著しく人目をひくところから天文学者は古來その観測を怠らなかつたのであるが、観測の結果は常に幾分の歪みを免がれない。その謎が解かれずにいたのに、後、大望遠鏡が据附けられるようになって、果して兩星各自の伴星が発見されて、ベツサー教授の推断が中つていたことが実証された。

ベツサー教授の推断は一旦発表された後は、少しの動き

だ信するのだというだけでは追付かなくなる。何とかしてその存在の理由を見付けたくなる。

それには色々の方法があるが、私が最も好んで用いた方法は、因果の法則を前提とする一種の方程式的推論でありました。常套語として知れ渡つている善因善果、悪因悪果ということは——と私は考えたのです——争えない事実だ。現在の状態は、よかれ悪しかれ過去の因から生じた果でなくてはならない。だから自分の現在、過去の果であるに違いない。もし自分に十の善があつて一の悪も無かつたなら、自分は今の善に値する現状にあるだろうし、その正反対の場合は正反対の果をもたらすに決つてゐる。

ところで、自分には果してどういふ因があるかと考えてみると、現在の自分の罪惡深重にして、善根薄少であるところから推して、過去も恐らくそうであつたらう。仮りに悪が八分で、善が——精々多く見積つて——二分とする。即ち 100 と 10 が自分の現在過去を綜合しての因とするとここに一の果が生じていい筈である。ところが私の当時の主観では——当時私はどつちかというと樂天的で、現状を厭うよりはむしろ享樂しつたつたので——私の現状を価値、即ち、快不快の点からみて、どうしても一のとは謂とれない、却つてすくなくとも——ではない十いくらかでなくてはならなかつた。この謎を解くにはただ一の方法があ

もなく通つていたのですが、私の方程式的仏力の推断は、どうも永續きのしないこと恰も不知火の如く、唇気楼の如くでありました。そうあるのに不思議はない。ベツサーのは客観的事実の観測にもとづくのに、私のは主観的評価でありますから、同じ人でも、その時、その時の気分によつて違います。得意の時が高く、失意の時は低く見積られれます。しかも余り低く見積られると、あの方程式は役にたたなくなります。あの方程式の有効は評価者の樂天観に依属します。厭世観の傾向の強い人には全然駄目です。かえつて反対に折角出来かかつた仏像を追払つてしまふかも知れません。同じ人でも、若い希望に満ちた時代には間に合つていたのが、年をとつて段々冷靜になるにつれて、不向になることも可能です。

こんな風に、仏陀を予想したり、想定したり、その他或は宇宙の本体といつたようなものを引つ張つて来たり、又時としては人類の愛や歴史のうちに認めようとしたり、手をかえ品をかえてさまざまに試みてみるが、要するにこつちの工夫で作らあげたものは、こつちの心持、猫の眼のようになる心持一つでこわれてしまふ。

で仏陀の見える時は得意、見えなくなると失望、それからまた見たいと焦る憧憬とが、走馬灯のように交々循環していつ果てるとも思えない喜劇、悲劇を演じつつ、ここに

もまた常没、常流転の歎きが繰り返されるのでありまし
た。

内省の促進

対仏的態度がこう一つところにお百度を踏んでいたのと
反対に、内省だけは絶えず進んで止まなかつたのでありま
す。或時はこういうこともありましたが、それは或非常に責
任感の強い人が、あるきつけかけから、自分が従来不真面目
であつたのに気付いて、それからというものは非常な煩悶
におちいり、世間からは軽蔑または非難の眼で見られるよ
うに思いこんで、くよくよとして引込み勝の日暮しをして
いたのですが、妙に私を信頼して、私にだけは頻りに胸中
の悶々を打ち明けるのでした。ところがそれを聞かされた
私にしてみると、その人の悩みのたねになる材料は、私も
負けず持合わしていたので、何のことはないその人は、
私の面前に現れて、私自身を責めたる私の責任感の具体
化、私自身の満身の創痕から流れ出る血に塗られた私自身
の影としか思えなくて、恐しくもあり情なくもあり、こつ
ちも同じ煩悶に引きずり込まれやしないかと、ひそかにお
じけをふるつたことがあつたのです。

大なる蔑視

こうした自分の真相を深刻に見せつける機縁が、あちら
からもこちらからも、私の身辺をめがけて押寄せてきた結

が、あの種の事業の一番槍の功名はたしかに求めていた
ではないか。むしろこの功名心が第一の動機となつて、
あのもくろみがかうまれたのだとは、今ではお前も知つて
る通りだ。勿論このことばかりにや限らない。その前に
も、その後にも、これと似たことは沢山ある。おまえの
記憶の糸を手繰つてごらん、数えきれぬほど、そろそろ
と出て来るだろう！公に関する事さえがそうだもの、純
然たる私事に至つてはなおさらだ。お前はいつもお前の
利益を中心として、それをおすに便利だとなると、表
に何とか理窟をつけたり、或はつけることさえないで
他人を犠牲とすることを厭わなかつた。どうだい思ひあ
たるかね。これが思い当らなかつたら余程どうかしてい
るのだ。いやしくも人と利害の交渉のある中で、お前の
することなすことが、実際さうでないのは殆んど無いと
言つていい位だもの！何たる自利一点張りの人間だろう
たまには瞑目一番、思ひを潜めて考えてみるんだね。も
つともそんなことをすると、とてもじつとしては居られ
なくなつて、假想の平和は忽ち失われてしまうかも知れ
ないが。

ところで話をまた前に戻して、今日此頃のお前は一体何
を考え何を望んでいるのだ。お前自身にきいてみるがよ
い。お前のうちに現に働きつつある動機——それが邪で

果、とうとう二進も三進も行かない窮境に迫り詰められて
ここにはじめて『大きな蔑視』に突き当つたのであります
『お前達の体験出来るもののうちで一番大きいものは何
か？それは大きい蔑視の時だ。お前達の幸福も、理智も
道徳もいやになつてしまふ時だ！』
とニイチエは云いますが、それとは多少趣意こそちがえ、
帰するところは同じ大きい蔑視に陥つたのであつた。

良心の声

良心は容を改め、声を劇しくして私を語る。

『お前の心の動きをみつめてごらん！お前は一体今何を思
い、何をしているか、表面は体のいい賢善精進でつん
でいるが、内には醜い虚偽不実が巣くつていてではない
か。今にはじまつたことじやない。お前の過去をかえり
みでみるがよい。反省にうとい人は俯仰天地に愧じずな
どよく平気で口にするが、この言葉のおそろしさを承知
しているお前にむかつてその言葉通りの態度を注文する
のは無理かもしれないが、たとえば公に関する問題に対
しては、よし公のみ私を忘るゝとまで行かずとも、せ
めては公を主とし私を従とするところまでは潜ぎつけた
ものだ。どうだねそれが調合えるかね。お前の目論ん
だ社会事業の経営にしてもそうだ。お前もまさかあのも
くろみで、金銭上の利益を得ようとは思わなかつたらう

ないと思えるかい？それが正しくないということはお前
自ら百も承知じやないか。だのに、お前は改めることが
出来ない。昨今はどう出来ぬのを見越してか、改めよ
うともしないではないか？何たるさうさうしい態度だ。
みるに見かねて私が口をきいたことも一再ではない。け
れどもお前の私心は、実を云うとこの私、即ちお前の良
心よりも遙に強い。初めは神妙に聞いているようにみせて
いざ尻尾を押えられる段になると——というのは、一旦
改めますと言つた言葉を裏切るような反証でも突付けら
れると、勿ち態度を一変して、くどいとばかりそらうそ
ぶいて、この老いほれめ、だまつている、おとなしく聞
いていりやあつけあがつて、など毒々しく咬刺をきりだ
す。あまりの仕打に腹が立つて取り押えようとしたつて
力ずくではとても駄目、私などは跳ね飛ばされてしまう
私の口から云いたくはないが、実際お前を左右するのは
私ではなくてお前の私心だ。試みに目を後に向けてごら
ん、要所要所にありありと私心の跡が見出せるではない
か。お前は眼を前に向けて遠くを見る間は、私の指図
にまかそうと思つているが、実行の一段になるとにわか
に私心のささやきに従つて私を袖にして恥しないのだ』

虚名に甘んずる？

良心はかう云つて長太息したが、やがて語り続けたとき

は、その面に皮肉な微笑の影が見えた。

『ときにお前は名誉が大好きだったね。お前の懐抱している人生の理想は名誉だ、と言つても過言ではない筈だね成程名誉もよからう。それに値する態度さえあれば！だがどうだね。お前はこれを考えてみたことがあるかい？お前のさきに観察した心の態度、昔からかわらない、更えようもしない、また更えようと思つても恐らく更わるまいところのお前の心の態度と、お前の至上の欣求とする名誉と、両者の間には何の矛盾もないかね。そうした心の持主が名誉を得るに値するものだろうか？それともお前の評価には名誉の代りに虚名の通用を許すという便法でもあるのかね？』

失われたる中心点

骨を刺す良心の諷刺は私を驚倒せしめました。黒闇々の空洞に投げこまれたのです。名誉、私にとつて何より大事な名誉。私の人生における唯一究竟の的であり、ひまわりにおける日輪のように、私の一切を葵向せしめる名誉。その名誉に値する資格の絶対否定、それが私の良心の批判なのです。それに対して私は一言もないのです。全部を承認せざらんと欲しても得ないのです。私の立つてる地盤が崩れ出して足のふみどころがなくなつたのです。生活の中心点が失われてしまつたのです。

言うまでもなく此の時には信仰は崩れていました。今まで往生極楽を願う衆生としては信仰、人類社会の一員としては名誉を一生の行路の目的として憧憬し、追求して来たのが、一は高峰の花、一は水中の月、手には取れないものとなつてしまつたのです。『茫々たる恨には渡に船を失うが如し、濛々たる憂には闇に道に迷うがごとし』にわかには盲目になつたと同じこと、どう生きて行つたものか、さっぱり見当がつかない。

目的のない生

目的のない生！それはとても堪えられたものではありません。千古の淋しさの漂う空虚。もしその空しさが満たされるのなら、羅刹の口にも飛びこむでしょう。自由を奪われたのではない、自由はそのままにありながら、その持つて行きどころのない無期の精神の牢獄です。いかに藻掻こうが悶えようが、いかにのたうちまわろうが、どうすることも出来ないのです。

かなしきは あくなき利己の一念を

(啄木)

これが宿業の重荷を背負つてる男の運命です。繫縛の凡夫のおちこむ必然の陥穽です。罪惡を餌食とする大竜は、その底で口を開いて待ち構えているのです。

ああ信仰がほしい

すでに名誉の方が駄目とすると、私は浮世にのぞみを絶たなければならぬ。それはまことに名残り惜しいきわみであるが仕方がない。社会人としての生命はつきたも同然である。この生き甲斐のない世の中に、唯一つ残されたのは超人的希望、即ち信仰である。考えてみればこんな破目に陥つて息塞る苦しさにあえぐのも畢竟信仰がないせいだ信仰さえあつたなら！

ああ信仰がほしいものだ！私ののぞみはこの一点に集中しました。私は息をこらしました。じつと思いを潜めました。光の一閃をもみのがすまいと、心の眼をば一杯に見張りながら。

弥陀観音大勢至 大願の船に乗じてぞ

生死の海にうかびつつ 有情をよぼうてのせたまう

呼び声

この時だつたのです。どうしたことか私の念頭に不図あの親鸞聖人の告白

『親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり』

という御文が浮かんだのです。その刹那、なかば、あわただしく御文を引寄せるように、なかばひしと御文に引付けられるように感じながら、私は——身心を挙つて——一途

に御文の中に没入した、と思う間もなく、忽焉としてある衝動を感じた。そうだ！私も聖人と一緒に！とうなずいて、心に「親鸞」とあるのを「私」と「よき人」とあるを「親鸞聖人」と読んだと思つた途端、一声、南無阿弥陀仏と称えたのをきつかけに、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、出水に堤が切れたかのように、渾々として高らかに、とどめなく念仏がほとばしり出たのでありました。

そうです、念仏が出たのです。あの言にくかつた念仏が出たのです。しかも続けざまに、よどみなく。生れて初めて念仏が何の懸念もなくすらすらと称えられたのです。

この間、私は未曾有の莊嚴な靈感に擲まれて、今までの淋しさ、苦しき、やるせなさ、一声一声の念仏に拭つたようにかき消されるあとから、何とも云えない心強い、たのもしき感じが、心の底から湧きあがるのを覚えつつ、はあ、これが信仰というものであつたかと、はじめて思い知つたのでありました。

『夫れ真実の信樂を按ずるに、信樂に一念あり、一念とはこれ信樂開發の時尅の極促をあらわし、廣大難思の慶心をあらわす』

私は今まで述べて来た私の体験で、この聖人の信巻末の冒頭の文を読まして頂いたと信ずるのであります。それは私の四十二の時でありました。世間でいう男の最大の厄年

に、前念に命終して後念に即生する、大悲廻向の大信心を獲さしていただいたとは、一入^{ひとしほ}ありがたさに堪えない次第でございます。これと申すも、ひとえに聖人のお手引によりましたので、この歎異鈔二章は、私にとつては、私の信仰を確立せしめた如来の金言であります。

『慶はしい哉。心を弘誓^{くわうせい}の仏地に樹^たて、念を難思の法海に流す』

この御文については後日ゆつくりお話し申したいと思いますが、私はこの樹心仏地という趣を、やはり第二章で、心的事実として味読さして頂きました。

金剛の信

この時を以て、私の信仰は、流転の数を免れない疑情の基礎をはなれて、金輪際ゆるぎのない仏智の地盤に建てられたのです。爾来十余の星霜を重ねて今日にいたるまで、時に多少の濃淡はあつても、本質的には一貫して始終かわるところがありません。かつて持て余した二問題はひとりでに解決をつけました。念仏も称えられれば、仏の存否も問題にのほりません。そのうえ、体験前には、ただの仏陀であり、如来であつたのが、体験後には、その仏に固有名が冠せられて、阿弥陀仏でなくては納まらなくなりました。阿弥陀仏のほかにどんな仏があつても、それは私と何の交渉がないとわかつたのです。

愛書と求道

近角常観 著「懺悔録」

近角師の懺悔録は師が入信の径路を物語られたものである。先ず歎異鈔は親鸞聖人の体験の披歴^{ひれき}であることを述べすべて信仰は体験しなければ何の意義もないと言ひ、師自身の信仰の経過を披歴していられる。

師は幼い時から仏陀を礼拝し、経典をも読み宗旨の学問の片端をもちが、後に帝国大学を出られたのであるが学生時代から宗教のために奔走し、心身を勞せられた揚句身体が無暗に疲れて心が何となく苦しくなつて来たということである。

そうしているうちにも、朋友同志がどことなく仲の悪いのが苦になつて、どうかして人間が仲よく仕合うようにしたいと思つて、出来る限りの心配をしようと奮発でやりかけて見た。ところが一家の人の心持から社会の上に至るまで、甲に善くすれば乙に恨まれる。どうしても皆が一処に心がまとまらん。そこで他人を不足に思うて

『唯念仏の衆生を觀^{みそ}して撰取して捨てざれば、阿弥陀と名づけたてまつる』

念仏申さんとおもいたつころのおこるとき撰取して捨てたまわないのは、弥陀一仏であります。その御いつくしみを頂いてその御名を称えまつる、それは自然の理であります。そしてこう自然に念仏する心持は、如来よりたまりたる信心として、過去、現在、未来の信者を通じて一つでなくてはならないのです。願わくば親鸞聖人の仰せにきいて聖人と同じ信心を頂いて念仏成仏是真宗と同じ道をたどりたいたいものであります。『信を行く旅人』より

世々生々の父母

有情のめぐりめぐりて六道に生まるること、なおし車の輪の始めと終りとの無きが如く、或は父母となり男女となりて世々生々に互に思あるなり。父母を見まつることく等しくして差別なかれ。聖智を証せざれば知るに由^{よし}なきも、一切の男子は皆これ父、一切の女人は皆これ母なり。如何でか未だ前世の恩を報いずしてかえりて異念を生じて怨み、ねたみをなさんや。常にすべからく恩を報いて互に饒益^{にようえき}すべきなり。

福島政雄

来た。人はなぜかくまで勝手であるか、自分が思うように世界がいかに。こう思うて来るとますます世界が悪くなつて来た。人々の間柄を調和しようと心がけた自分が遂には自分から隔てたり、恨んだりすることになつた。

このようにして、四月八日、釈尊の降誕会となつても少しも愉快でなく、書物を読んでも教場に出ても一向面白くなく、ただ人生上のことを気にして考えてばかり居られた。仏様も一向ありがたくないようになり、食うたり飲んだりする上に、少しばかりの味があるのみという有様になり、人を殺すのも何ともないと思ひ、自分が死ぬのも何ともないようになり、五月二十三日晩には自分で死のうかと思われたというのであり、このようにして学校もやめようかとしたが、友人から励まされてようやく試験を受け、それから松島に開かれた仏教夏期講習会に行かれたが、ただ苦しいばかりで、多数の人の顔を見るのが何よりも苦し

く、天下の美をあつめた松島の風景も更に面白くなく、二週間友人に苦悶を訴えて人をいじめ通したと言つて居られる。

其時に、世の中に真実の朋友がほしい、如何なる時にも我れを見限らず、満腹の同情を以て我れを慰め、我れを導く友人をほしいとしみじみ思うた。

と言つて居られる。

親しい友人で心配して師のことを夢にまで見てくれたその友人を松島からの帰途訪れても、わけのわからぬことばかり言うて、まるで狂気のような有様であつたという。自分の家に帰つても黙つても何も言わず、親から叱られても慰められても、一向に効がないという有様であつた。

八月に及んでは苦悶の頂上であつた。一つの小座敷の中に足をつま立ててキリキリ舞うて居つた。此の時大無量寿經の五悪段の一言一言が、皆私のことを書いてある如く感じた。

「徒倚懈惰にして、あえて善を為し身を治め業を修めず家室眷属飢寒困苦す。父母教誨すれば、目を瞋らして怒りことう。言令和がず、違戾反逆す。譬えば怨家の如し

子無きに如かず」

これらの教説が一つも他人の事とは思われなかつた。併しそれでも仏様をありがたく拜むことは出来ぬ。日夜に泣き悲しんで、一心不乱に仏に祈りて救われんことを求めたが、少しも何の感じもなく、泣き涙出ぬような心持であつた。

この心の苦しみは、やがて身体の苦しみを呼び出し、九月になつて腰部が痛くて帯が出来ない、ルチユーという病氣肉の下が膿む非常な難病に罹られた。心身の苦惱が絶頂に達したのである。

それから長浜病院に入院して切開の手術を受けられた。その事を決められたのは師の父君であつたという。この時も師自身は死ぬるということを更に氣にかけず、ただ自分のあさましく罪の深いことばかりを苦しんで、どうか善い友人をほしいとばかり思われた。

病氣は少しく快くなつて病院を出たときは九月の十五日である。十七日に初めて病院へ切り口を洗いに行く途中車の上で、自分は罪の魂である、実に極悪である。生きて居るとするのは名前ばかりで、実は途上の石ころとあまりかわりはないと思つて、淋しく味気なくて堪らなかつた。

つた。それから病院から帰り途に、車上ながら虚空を望み見た時、俄かに気が晴れて来た。これまでは心が豆粒の如く小さくあつたのが、此の時胸が大に開けて、白雲の間、青空の中に吸い込まれる如く思われた。何だか嬉しくてならんで家へ帰つたが、叔父が私の顔を見て、どうしたのか、一時に顔が變つたと大層喜んでくれた。

この心の転換は仏陀の大悲に目がさまされたのである。真の朋友を求めて居つたが、その理想の朋友は仏陀であるということがわかつたと言われる。

仏陀は此方が悪ければ悪いほど、いじらしく思うて下さる。此方が隔てれば隔てるほど、仏陀は胸を開いて迎えて下さる。此方が悪く思えば思うほど、いよいよ善く遇して下さる。こういうお方がましますということを知らずに、今まで心を苦しめて居たのはあさましい。仏陀仏陀というて居りはしたが、仏陀は我がための真の朋友であるということは一向気附かなんだ。然るにかように、我が真の朋友は仏陀であることを、ひととわが胸に感じ来つてからは、日に増しありがたく感ぜられて、十月に入つては、人に対して懺悔話をして仏の慈悲をありがたく喜ばせてもらふことになりました。

これが師の入信の径路の大略である。その苦悶は大なるものであつたが、正しい道を求める苦しみであつて、愛欲煩惱に溺れるというような苦しみではない。師は純粹の心を持つた人であると感ぜられる。

仏陀を真実の朋友として感ぜられたという。そこに師の最初の廻心の中心がある。併し私は後に師に従つて御講話を聞きとおしたのであるが、仏陀を真実の朋友として説かれたことはむしろ少く、親としての仏陀のお慈悲を説かれることが多かつた。師の廻心の背後には、力強い親の心があつたと私は思う。

ルチユーという難病について、手術を受けさせるという決心をなされたのは師の父君であつたという。この父君は師の九才の時であつたか、姥捨山の話を師にお聞かせになつたという。その姥捨山の話は非常に深く師の心にしみ込んでいて、入信後の師はその説教の時に必ずこの話をせられたのである。三十才以後の師にはこの姥捨山が生きた信仰を物語られる大切なものとなつていた。私など何十回師のお話をきいたか、その度毎に必ず姥捨山の話が出た。それは子が親の大悲を心から感じて不良の子が転向する物語である。この物語をいつも繰返されたところに、師が父君に対する無量の感がこもつていたと私は思う。

病院からの帰りの車中で急に心が開け、虚空を望んで、

豆粒のようであつた胸が大に開けて、白雲の間、青空の中に吸いこまれるように感ぜられたという。その背後に父君のお慈悲が動いていたと思う。

この父君は世に隠れた近江の一小寺の御住職であつたと思われるが、その信仰は非常に深く常観師の幼少の時から強い感化を与えられたものと私は感じている。西洋に旅行して御両親のことを不図思い出されてたまらぬようになり即座に帰朝のことを決心されたというところに、私は深く感ずる。

師が入信せられても後にも父君は「常観などもどつとせぬ」と常に言つて居られたと承つて居る。そこに父君が子に対する無限の希望をいだいて居られたことを私は感ずる。それで師の信仰を根本的に養われたのは父君であると感ぜられる。親のお慈悲を無限に説かれた師の御信心の源泉は父君にあつたのである。

更にさかのほれば、師は幼少の時、母上が手織の着物を新しく着せて下さつたのを友達からさんざんに汚されて帰つて来られた時、父君は決してそれを許されず「他人に泥をぬられておめおめと帰つて来る腰抜があるか、是非とも泥をつけた奴に洗わせて来い」と叱りつけられて、決して家に入れられなかつたということである。

このような厳しい教育をも行われた父君である。この父

遇斯光録

清浄光明ならびなし 遇斯光のゆえなれば

一切の業繫ものぞこりぬ 畢竟依に帰命せよ

清浄光明澄み、淨し、食欲の罪を消さむれうにあ
らわれたもうひかり。

遇斯光このひかりにあうもの

業繫業につながる。

畢竟依報身のさとのこるところなくきわまりた

まいたりというころなり。

遇斯光録とは、弥陀仏の淨くすみわたる光にあつて、自然に深く心に感動したこと集録の意味であります。本稿はとくに近角先生が御自らその体験の上からのおよるごびの聲とその教に浴された方々の心に深く感銘されたものの集録をさせて頂きました。ことに本年は明治百年を迎えましたについて明治、大正、昭和の三代にわたつて親鸞聖人の真面目をお伝え下さつた近角先生の御恩をあたらしく仰ぎ、その御信徳に浴したいと祈念しております。

君の精神が幼少の時からしみ込んでいるのである。それ故師の入信にはそのうしろに偉大な父君の強い力がはたらいているというのである。

仏陀のいのちの一面は慈悲であるが、他の一面は智慧である。慈悲は温ため智慧は照らす。私は師の教えに慈悲の面を多く感じたが、併し智慧の鋭さをも折に触れて感じていた。師の入信の径路には慈悲真実の深い感じと共に、そのうしろから父君の養われた鋭い智慧の光を感ずるのである。

(昭和四十一年一月九日稿了)

人間の真理誌より

歎異鈔の特長

歎異鈔は前章後章脈絡が貫通してあると言わんよりは、むしろ同じことが言をかえ方面をかえ、人生の折々にあらわれ出でたる信仰の光である。故に一章の味が真実にわかれば皆わかるのである。四大海水も一滴味わえば其鹹なることを知る如くである。

「歎異鈔講義」近角師著

花田 正 夫
教 雄

池山先生よりの闘書

昭和六年十一月卅日に脳溢血で近角先生は病床につかれましたが、七年の七月頃には段々恢復せられて、遠方の訪病客には時間を限つて面接されるまでになられたと伝聞された池山栄吉先生は早速京都から御見舞に出掛けられました。

その時、池山先生は内心に「あの活動家の近角君が病臥の生活だからどんなにか淋しくしていることだろうか」と胸つままる思いで病室におはいりになると、

「君よく来てくれた、握手してくれたまえ」と不自由な右手を左手で支えながら、手をのべられた。そして、満面喜悅のなかから、

「信仰、信仰、信界建現、で生涯働いて来たが、教行信証さえあれば真宗は不滅である。又思想問題が種々論ぜられてはいるが歎異鈔が後世にのこるのだからそんな心配はいらないということが知らされた。」

と語られた由であります。

○ 「嗚呼教行信証真宗存 信界建現何為要狂奔
歎異一篇伝後昆 思想險惡何足論」
とはその頃の近角先生の詩であります。

○ 大正七年、池山先生の奥様が胃痛も段々悪化せられるに及び、生前に送別会を催されました。近角先生もお見舞になりましたが、奥様のお喜びがあまりにも大きいので皆の人が「不思議じゃ、只事で無い」とまるではやし立てて居るような気楽な話になつていて、今痛で逝こうとする方の心持を汲んでいないのを叱られて、次に其頃撫順炭坑の爆発で一命を拾うた向坊さんの話をされました。

「向坊さんは日頃から強信のお方であるが突然爆発に遭うて人事不省になつた。その時々失敗つたと々大声を發した。幸にその声を聞きつけて酸素吸入をかけ介抱したら、南無阿弥陀仏々々々々と息を吹きかえして来た。これは爆発でたおれる時ばかりでなく吾々病氣でたおれる時もこれと違わぬのである。〃しまつた、〃より外ない処が、かくしまつた、残念と叫んで死ななければならぬその残念さを〃さぞ残念だろう、その汝を何処までも見捨てぬぞ〃とこのお慈悲が聞こえるもの故、心の中に〃

ります。

「何処までも〃お呆れない御真実！」
これが超世不可思議のお慈悲にてまします。

○ 私には子供の時から兄貴に言われましたのは「外に賢善精進の相を現して内には虚仮不実を抱くな」と。これ善導大師のお言葉であります。私は終戦直後大阪へ行つて講話しました時、外国の宗教と日本の宗教とのはつきりとした区別を言ひあらわす言葉はないものかと思つた末に、それをあらわす言葉としてこの一句を選んでお話ししました。

「お前人様に親切をするなれば見せかけでなしに、本当に腹の底の底までやらねば本当のことでないでないか。親切をするなれば、その様でないといけない」
兄貴は実によくこう申しました。

○ 私も永年兄貴の許にありまして兄貴よりお慈悲のこと色々と言われたが中々それが分らなかつた。何時もの話ですけども

「弟を子供の時から育ててきて彼に不足はなけれども、彼が何時まで経つても〃我慢のやまぬが困つたものだから哀相なものだ」

ありがたい！〃とそれで死ぬ故、死ぬ時心の中が南無阿弥陀仏、従つて目が覚めた時、南無阿弥陀仏が出たのである。向坊さんのは娑婆へ目をあかれたので娑婆で南無阿弥陀仏となられたが、これが未来へ開かれたのなら浄土へ南無阿弥陀仏となられたのである」
と池山先生の奥様はこれを非常に喜ばれました。

常音先生よりの闘書

兄貴は常に申して居りました
「悪を恐れざるといふことは、悪を気にせないといふことだ」と

○ 人間に生れて火の実意がわかるというは大変なことでありまして、小さなことでも嬉しいものですが兄貴が私へ「あんな者いかぬと言わずして、彼のいかぬところが可哀想」

と申うてくれたこと。これ！このところをよく聞いて頂きたいのであります。このような話は、人間界の話ではないのであります。特別、拵けたはずれのものであります。

「広大の御本願、何処までも呆れぬ」

と仰せある仏のお慈悲といふことは小さな話でないのと申していただくと、人ずてに聞き、それが意外のことでありましたので、それに驚いて喜ばせてもらいました。

○ 私の兄貴の話というものは、十年一日の如く「お見捨てない大慈大悲の仏さまありがたい」と、こればかりおきき頂いたのであります。

○ 兄貴が「我慢の止まぬが可哀相」と私に云うてくれたことは誠にありがたかつたのであるが、どうしたことかありがたいありがたいにボケて終うて、浄土の眞証をおとしめていた。何時の間にやら肝要の本願御建立の精神を軽視していたのであります。半年の後それに気付いて兄貴に持ち出して尋ねたのであります。すると、

「われわれお慈悲を分らせて貰うても、またやりそこない、またやりそこない、それだからお呆れないお慈悲でないか」

と申してくれましたのであります。これは他力のお言葉としては大変なお言葉なのであります。私はこれを聞かされてからは、その後どのように此方が間違つても、間違いを取り消そうと致しません。この心得そこないをして変になるともその者をどこどこまでも憐れに思召しおあきれ下さらぬお真実と承つた上は、此方の間違つても、間違わぬでなしに、

それをお見捨てない向うさまの思召しがありがたいのであり、それだけが私の力とさせて頂くところなのであります。

○ 兄貴が言いました。

「跡戻りあともどりして迎るらん甲斐なきことに心迷いて」とね。またやり損いまたやり損いはそれでしよう。

○ 「死ぬことはつらいよ。簡単に考えていては駄目だ」と兄貴は云いました。

○ 「何が人間、間違いかと言うに、吾々御同様の間に於いて、この事一つ間違いないと思つてゐること、そのことが一番間違ひである。

矢でも鉄砲でも持つて来い、これだけは誰が何と言うとも間違わぬと思つてゐること、これが人間何より恐しい、これが間違ひの根本である」

この兄貴の言葉を聞いた庄三さんの奥さんは驚いてしまったのであります。「わたし位信心者は無い」と考えて高あがりしてゐたことの間違ひと気付かれたのであります。

○ 兄貴は一代皆さんに仏様のことに聞いて頂きました。その兄貴の話の骨子というものは何を聞いて頂いたかと申しま

大経の「唯除五逆、誹謗正法」の解釈について、曇鸞大師は曰く

「観經に五逆は救われてあるも、正法誹謗はゆるさされてないのは、誹法の罪の方が五逆の罪よりも更に重いらだ云々」

とある。兄貴これを解して

「一切の間違つた行為はすべて間違つた思想より起る。故にあらゆる悪業よりも、正しい思想、を無視する思想そのものの方が最も悪い云々」

これは、自己を是なりとしてあくまで正法をなみする自我主張を指すのである。

○ 私は兄貴が信心いただけ／＼と私に言うてゐるよりに聞かされたのです。ところがそうではなかった、信じられぬ者を信心頂いた者と同様に思うぞ、すこしもへだてぬぞ、というお慈悲でありましたのや。

○ 私は兄貴が悲しい時には悲しみ、嬉しい時にはよろこびことに思うことが実現出来ぬ時には困つて弱つて、私共と同じ凡夫の姿のままに広大な慈悲一つを信じてよきこともあしきことも業報にまかせて唯念仏して安心してゐた。

すと、色々言い過ぎるかなれども「仏のおまことがありがたい」これを申してしたのであります。煩悶して苦しみに到つた狂いのようになつた結果が最後どうなつたか、世間は

その気狂の者をかえりみない、可哀相といわぬ。○ 仏は「お前間違わぬ間違わぬで間違つてしまつた。それが気の毒、案ぜられる」と、斯く仏に言われて見て到々兄貴は、仏様の御同情だけで安心させて頂いたのであります。兄貴の書物御覽下さつてもおわかりの通り、ここが骨子として出ているのであります。

○ 私も始めて仏様の御心に気付かして頂いた時明らかにさせて頂いたことは、私それまで兄貴を殊勝な人と考え、私のようなやくざ者はとても近寄れぬ、兄貴は善い性分に生れ、人間が真面目だからあんなに煩悶して苦しみ、それだからお救ひ蒙ることが出来たのだ、よい性分故信仰きけたのだと思ひました。然るに私はやくざな性分であつた。とても兄貴みたいな立派な御信心頂くこと出来ぬと思つてゐたのであります。思ひがけぬ大慈大悲に遇ひ奉つてみました時に気付いて見ますと、この考えはあべこべであつた事を知らされたのであります。

兄貴も自分のやくざ、仕様のない性分であつた故に、あのように煩悶し遂に仏様を喜ばせて貰うたのであつたと分らせて頂いたのであります。

それこそ本當にありがたいことと思つてゐる。

白井成允先生より聞記

大正八年から東京を去るに至つた略十年間先生の御教を承つた。そして聞きはじめた四年になつても徹し得ない自分の不真面目を歎いて座談会の席で訴えた。先生は溢れるような御同情を寄せてくださった。

「君は真面目になつたらお慈悲が聞こえるのだ、信心が得られるのだと思つてゐるけれども、そんなことを私が何時語つたことがあるか。自分の真面目で仏様の信心を擲もうとでもしてゐるのか。自分の真面目で擲み得るような信心ならば、それはまた自分の心と一緒にどうにでも移り変わるものだらう。そんなつまらない信心など得て何になるか。○ いったい君は真面目になつて／＼と思つてゐるけれども、君が自分で真面目になり得るのか。仏様は君に向つて真面目になれ、真面目にならなければいけない、などと言われはしないではないか。

○ むしろ反対に、仏様の御心では、君がいくら真面目になろう／＼と思つても駄目なのだ、とても真面目にはなれないのだ、真面目になれないのが君の本性なのだ、その本性がいかに／＼可哀相でたまらない、といつて、君の真面目になり得ないその処に何処々々までも同情し、飽くまでも救うぞと呼んで下さるのだ。真面目になつて信心を得よ

と言われるのではなく、君がどうしても真面目になれない者だと見抜いて、その真面目になれない君の姿にどこ／＼までも同情して捨てず、必ず救わずには措かないと、かかりきって下されるのだ。仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられ、罪悪深重煩惱熾盛の凡夫を救わんと願うて下されたのだ。君はこの仏の本願を聞かずに、自分の思いで全く逆の方に向いているのだ……」

凡そこのような事をその時先生は厳しく告げて下された私はそれをお聞きして今まで自分の思っていた所が全く逆であった事を知った。真面目になるう／＼といくら努めてもどうしても真面目にはなり得ない自分の本性に始めて眼がさめた。こんな不真面目な者でいながら真面目になろうなどとする事が、身の程も知らぬ甚だしい驕慢なることを覚えた。そしてかかる不真面目な者を不真面目なるが故に飽くまでも救うと呼はるる無限のお慈悲を聞いた。

……その時まで焦り求めて来った心の煩悶がその時から解かれた。そして不真面目が気にかからなくなった。不真面目な自分の姿が現れるとすぐにお念仏が現れて下さる、こういう如何ともすることの出来ないあさましい自分の苦惱を飽くまでも知ろしめし慰れみ下さる限りなき御涙がおのずから感ぜられてくる。これは今日の私にとって限りなくありがたいことで、全く唯一の救いである云々。

「近角先生に別れまつりて」より

ゲーテの言葉

何でもただ聞いたばかりで知識を得ることは出来ない。あることについて自分で一生懸命に骨を折って見ない人はただその事のうわつらを知ったばかりで、実は半分も判っていない

人は隔てなく交際つまよしてその人を知ろうと努めても、お互の胸中を知り合うという事は容易なことでない。そのうちにつまらない気がさして今までの交際も努力も打毀してしまふものだ

人は他人の口をふさぐことも防ぐことも出来ない。ただ他人が云うままに云わしておいて、自分でやるだけのことをするよりほかない。そうすれば仕舞には口の方が負けるものだ

ドイツに咲く念仏の花

(フランス)

山田

宰

拜啓、すっかり青葉の気節となり、フランスの山山もようやく春が訪れて参りました。身体が何となくたるい感じの気節であります、お変わりございませんでしょうか。

長い間ベルリンのピーパーさんには御無沙汰して居りましたが、最近手紙を送り、長い御無沙汰をして本当に申し訳なかつたこと、その長い間ピーパーさんがいよいよ弥陀に帰依して来られたことをいろいろの方からうかがいましたこと、そのことはピーパーさんが私の言うことなどによってお念仏の道に入ったのではなくて、直接仏のお計らいによって弥陀に帰依された何よりの証拠であること、まことに人の言うことを聞くより弥陀の声を直接聞く方が、人を見るよりも仏を直接仰ぐ方がどれ程たしかなかなか分らないこと、また念仏者の徳はその無碍にあることなどを書き送りましたところ、次のような手紙が参りました。

長い間忘れなかつたこと、本当の仏のおしえというこの世の中に存在する高価な賜物を頂いた喜びを述べ、佐藤三

千雄 (西本願寺伝導院、竜大教授、ベルリン留学者) さんから私のアドレスは聞いていたが病気がひどかったので、ついそのメモを失って失礼していたことを述べたあと、

「……私は宗教経験を言葉でよく表現する能力を持合せていません、しかし言われてあることは本当であることが確かめられました。外部的なことは何もみません。

私は一九六五年から一九六六年にかけて非常に病氣を注射しても克服することが出来ませんでした。しかも一瞬といえども私は内的に不幸ではありませんでした。痛みのため涙が頬を流れるときでも、本当にそれは不思議ではありませんか。

それからなお八年前に口にお念仏を称えて亡くなった最初のドイツ人が居りました、オーベルバイエル(南ドイツの州)のリゲゼーのルドルフ、フライエール、オホーン、マルツアン氏です。私は彼に、私があなたから習っ

たことや自分で経験したことを述べることができま
した。つぎに二年前ベルリンの浄土真宗協会の会長であ
った私の友人オスカーノイマン氏が口にお念仏を称えて亡
くなりました。ルドルフさんの息子のバレンティン、フ
ライエル、フォンマルツァン博士(医師)は、彼の父が
世を去るに当って、ひどく影響をうけて直ちに親鸞聖人
の教えに帰依し、今日ベルリン真宗協会の会長をして私
を非常に助けてくれます

ここ数年の間に多くの日本の教授が私を訪ねてくれま
したが、どうしてか私にははっきりしませんが、彼等は
本願の不思議な力を学問的に解析し注釈して、解り易く
するのに大変骨を折ってくれました、しかしながら我々
はどうしてそんなことをという疑問を常に抱きました。
そんなことはすこしも必要ではありませんでした。とい
うのは我々には我々の範例がありました。そしてまたそ
の数が多すぎました。その中の一人の方が四カ月ベルリ
ンに滞在して我々と知り合いましたが、帰られる時、ヨ
ロッパを発つ前に絵はがきをくれました、一体私ノが
そんなに大きな影響を人々に与えている所以はどこにあ
るか教えて下さいと書いてありました。

私の親愛なる同朋のあなたノあなたは私をよく御存じ
です。あなたは私が決して卓越した話術を持っている者

はありません。

そしてこの感謝のために私は他の人が望めばこの無限の
力を持った幸せをもたらす教を示すために、私の出来る
ことをしますし、私が何か出来る限りこれからもやって
参ります。そしてこれらの経験はお念仏の賢い定義より
も、もっと確かな証拠のあるものです。知的な学問はこ
の光には何も導いてくれません。ただ唯一のものは不動
の信仰です。

ただ時々私が教えと共に信仰を伝えることが出来ない
という事実に向面するとき悲しいものがあります。しか
しながら歎異鈔にあります「浄土の慈悲は念仏していそ
ぎ仏になりて大慈大悲心をもておもうがごとく衆生を利
益するを云うべきなり」この可能性が我々に残されてい
るのであります……」

このあと、どうかまた手紙を下さいますよう、もし時間が
許されるなら数行でも書いて下さい、などとあります。

この手紙を読み返すたびに深い感激を押し寄せることが出来
ません。〇〇さんの歎異鈔などには依らないで、池山先生
の独訳歎異鈔をしっかり読んで下さいということを最後
に、ずうと前に文通を絶っておりましたが、その間よく聞
いて下さったという感じであります。この手紙の歎異鈔の
引文は池山先生のものです。早速いろいろ手紙を書いて差

でないこと、輝くような講話で周囲の人に感銘を与えた
り、だれかに影響を与えることの出来るような能力を持
っている者でないことを確かに御存じです。私はそのよ
き教授の方にただ次のように書くことが出来ただけです
私は何もしないのです、それはただ生きた、すべて未
通った弥陀の光の働きです。そこから周囲にいつも作用
が現われて来るのです」と。

そして今あなたの親愛なる手紙を読むとき、あなたも
この見地に立っていられることが分ります。大きな弥陀
の慈光によって、そしてまたこの教を再び我々にひろめ
て下さった我々の祖師親鸞聖人の良きおはからいによつ
て、現在あることそのままがすべてよいのです。

今日なお私は毎日歎異鈔を読んでいます。そして私は
この世を去るまでこの本を読み終えるというこはな
いであろうと思います。というのはいつも私は何か新しい
ことをそこに見つけ出すからです。

勿論外見は私も年をとり老いてきました。そして病の
ために弱ってきました。背柱癒着のためと医師が言うよ
うに、私の心臓が非常に悪いために私は杖をついてゆっ
くり歩きます。しかしもう一度申しますが、それでも私
は幸福です。そしてそれはただすべてを包摂する弥陀の
慈悲の結果に過ぎません、それこそありがたいという外

し上げたいのですが、特に「臨終の時まで一向妄念の凡
夫」とのおしえや、慈光誌の「生死の問題」の所々など伝
たいと思っておりますが、何分にもドイツ語の方がさ
っぱり不調法になって言うことを聞いてくれません。私もこ
れから毎日フランス語で歎異鈔を読んでみようと思ってお
ります。フランス語の中に歎異鈔の生きた感じが汲みとれ
ないような訳では駄目でないかと思っております……。

(編者註)

山田さんは電磁気学研究のため昭和廿八年名古屋大学か
らベルリンに二年留学、その時歎異鈔を通じてピーパー
さんその他と法縁を結ばれました。その頃西本願寺の大谷
光昭門主のベルリン巡教を機にピーパーさんは直ちに人
門しベルリン浄土真宗教会の中心者となりました。

山田さんは帰朝して名古屋大学に復帰されましたが昭和
卅三年フランスのグレノーブルに留学、満四年を経て帰
国、通産省の電気試験所に勤務、四十一年再びグレノー
ブルから招かれて渡仏されました。フランス語訳歎異鈔
は最初のフランス留学中に完成されましたが、続いて補
修しつづけて居られます。フランス人に歎異鈔が読まれ
る日の来るようにと念じつづけて居られます。

あ と が き



若葉もすぎで青葉のたくましい頃となり
ました。本年は明治百年をむかえて、各
面に、明治、大正、昭和の三代に渡つて活
動された方々が紹介されております。廢仏
棄釈の嵐のあとをうけて仏教界にも大きな
足跡をのこして下さった方が沢山ありま
す。

池山先生は、近角先生の莫逆の友で、南
山に鼓を打てば北山に舞うの概があらま
した。先生の入信の経路を頂きました。こ
れは十数年前慈光誌に御紹介申しましたが
再読して下さいますことを切に願う次第で
す。

近角先生は明治三年にお産れになり、昭
和十六年の大平洋戦争勃発の直前に日本の
前途を非常に悲しまれながら、十年間の脳
溢血症の療養生活を閉じられました。はじ
め理想主義に立たれた先生は二十八才に及
んで大煩悶におちられた末、その九月に
忽然として「真実の朋友は仏」ということ
に気づかれ、爾来七十二歳の御生涯を貫い
て、このこと一つを表に裏に、右に左に伝
え伝えて下さいました。現にそのお導きを

渴仰せられる方々も各地に沢山居られ、こ
とに明治百年の仏教界をしのばれて感無量
のことと存じます。

先ず福島先生の近角先生の御著書の読後
感を引き続き頂きたいと存じます。又「遇
斯光録」と題しまして、先生の信徳からほ
とばしたた実語を有縁の方々から頂き、あ
らためて掲げさせて頂きます。

フランス通信は、目下フランスのグレノ
ーブル研究所に居られます山田幸さんの最
近の通信であります。それでドイツのベル
リン浄土真宗協会のピーバーさんの心境を
知り、本当に嬉しくたのもしく思い早速誌
上に掲げました。ことにピーバーさんがこ
の十四年来真面目に求道を続けられ、念仏
の花があちこちに開く今日、

「私は何もしないのです。それはただ生
きた、すべて未通つた弥陀の光の働きで
す。そこから周囲にいつも作用があらわ
れて来るのです。」

と「親鸞弟子一人もたす候」また「無備無
愧のこの身にてまことのころは無けれど
も弥陀廻向の御名なれば功德は十方に満ち
たもう」の祖聖の御心そのままを身につけ
られていることに思わず襟を正しました。

又、リンカーンが奴隷解放の戦いを五年
続け、ようやく難関を越えた時「奴隷ト
ウ夫人を白亜の殿堂に迎えて

「貴女のおかげで私の苦戦の時に欧州の
友から非常なたすけをうけ、やつと難事
を成し遂げました。然し見たところ優し
く弱々しい貴方がようも立派な万人を動
かす文章を作られたものだ」

と驚きいぶかると、
「いえあれは私が書いたものではありません
せん。私が書いたものでどうして万人を
動かせましよう。ただ悲惨な奴隷生活の
上にあらわれる神の思召しをそのまま書い
たので、私はペンを持つ道具にすぎませ
んでした」
と答えたと伝えられます。このことも思い
併せませす。

御 案 内

○七月第一日曜は一道会は休ませて頂きま
す。第二、三日曜は午後一時半から開き
ます。

○二十四日は昭和区小桜町教西寺で午前
后、法話会をいたします。

定 価 半年 二百円 (送共)
一年 四百円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花 田 正 夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大宇福谷
印刷 人 本 田 政 雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発 行 所 慈 光 社

振替口座名古屋一〇四七〇番